

---

# 雷の誓約

K K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雷の誓約

### 【Nコード】

N7006B

### 【作者名】

KK

### 【あらすじ】

古来より人を人外のもの「妖魔」から守護してきた者達がいた。名を「精霊術士」。彼らは物質に宿る精霊の力を借り、現実世界に己の意を振るう。「妖魔」が蠢く日本に雷鳴が轟く!?

## 0話 プロローグ（前書き）

小説を書くのは初めてです。拙い文章力をフルに活用して書いていきますので何卒御手柔らかにお願いいたします。

## 0話 プロローグ

ピロロロロロロロ...

携帯の着信音が爽やかな早朝に木霊する。

ピロロロロロロロ...

…がしかし、その主は未だに惰眠を貪ろうとしていた。

整った顔立ちに短い黒髪の彼、名を神代雷かみしろ らい一応この物語の主人公である。

ピロロロロロロロ...

「…だああああ！？うつせえ、誰だ！？こんな朝っぱらから！！」

ピロロロロロ…ピッ

「…誰？」

仕方なしに携帯を手に取るが、応答は苛立ちを包み隠そうとしない素っ気無いものだった。

## 1話

雷は不機嫌だった。

本来なら未だに惰眠を貪っていたであろう時間に叩き起こされたからである。

…が会社や学校に行くなら確実に遅刻する時間だったりしたのだから文句は普通は言えなかつたりする。

「…ああ、京子の奴！！こんな朝っぱらから電話してくんなよな！！」

…彼には関係なかつた様だ。

彼は昨夜留守電を設定し忘れた己の愚行を呪っていた。

…つくづくだらしない男である。彼は今朝の電話の内容を思い出していた。

……………

「誰？」

雷が不機嫌そうに電話に出ると、

「私よ。」

相手も随分無愛想だつたりした。

「和田志さんですか？いやあ、多分番号間違えてますよ。じゃあ、そういうことで。失礼します。」

軽口で相手を誤魔化しつつ、電話に出てしまったことを壮絶に後悔し、ちやつかりと電話を切ろうとする雷。

「待ちなさい。殺すわよ？」

…誤魔化せるはずもなかつた、というか事態を悪化させただけの様だ。

誰もが聞いてしまったことを後悔するような絶対零度の言霊を吐いたのは、霧島京子きりしまきょうこ。一応一流の陰陽師だつたりする。

普段は小さな喫茶店を営んでいるオーナーだ。

セミロングの艶やかな黒髪が映える知的な美女である。

本来なら優しい彼女もつまらない軽口でちゃっかりと逃げようとした雷に御立腹の様だ。

「ひいひい！？ごめんなさい。ごめんなさい。京子様！！調子に乗ってました。ごめんなさい。」

…物凄い卑屈っぷりである。

「…まあ、いいわ。分かれば…それより仕事よ。昼に私の店に来て。」

あきれた感が出ている京子が言うと、

「えええ、俺今日オフの日なんだけど…。」

「ホントに殺されたいのかしらね？」

「いえ、謹んで御受け致します。では一時に。」…ガチャッ。

悲しいほど即答だった。

## 2話

何だかんだで結局雷は喫茶店

「Mist」の前に居た。

時間も丁度一時を回ったところで約束の時間には充分間に合うのだが…

「…なんか気が乗らねえんだよね…面倒くせえし…」

雷は店に入る事を躊躇っていた。と言うのも京子が回して来る仕事を受けてろくな目にあつた事がないからである。

今回の仕事も大抵その例に漏れない厄介な物に違いない…雷はそう考えていたのだ。

「何してるの？さつさと中に入りなさい。それともこんな所で話す気なのかしら？」

…がしかし、まあ、選択の余地は無い様だ。仕事を受けるにせよ断るにせよ、先ずは仕事の内容を知らなければならぬ。

雷は内心嫌々ながらも

「…分かったよ。…んじゃ、まあ、邪魔するぜ？」

京子に従うままに店の中に入って行った。

店の中はログハウスをイメージさせる落ち着いた雰囲気を出している空間で、オーナーのセンスの良さが手にとる様にわかる。

東京という大都会の中に在りながらそういった独特の安らげる空間を作り出していた。

「まったく何をしているのかと思えば…惚けた顔して店の前に突っ立ってるなんてね。行動のトロさは折り紙付きなのね。」

店の優しい雰囲気軽くぶち壊す毒舌。

この知的な美女は、雷に対して辛く当たり過ぎる傾向にあるようだ。

「ああ？そりゃねえだろ？一応時間は守ってんだぜ？」

透かさず反論する雷。…がしかし、

「あら、口答える気？それに時間通りに来ってあんな所につつた

つてちや意味ないのよ。そもそも男なら約束の十分前には来なさいよね。約束通りなんて当たり前通り越して愚かしいのよ。」

…雷が哀れになるような（むしろ哀れなり雷）無茶を散々まくし立てる京子。

「トカイコワイ、トカイコワイ…」

遂には意味不明な現実逃避に追い込まれる雷。

…情けない限りである。

「…ふう、まあ、くだらない無駄話は置いて仕事よ。し・ご・と。」

…落ち込んでいる雷を落ち込ませる原因となった本人は気に止めもせず仕事の話へ強引に持つて行く。

「トカイコワイ、トカイコワイ…トカイコワイ。」

「じゃ、仕事の内容を話すわね。」

…哀れなり雷。

### 3話

「貴方にやって欲しいのは、ある人物の搜索及びその人物の保護よ。名前は、神童桜。写真は…これよ。」

そう言つて京子が差し出して来た写真には、白のワンピースを来た少女が写っていた。

ショートボブの黒髪に天使の様な笑顔映える。

「歳は17歳。偶然だけど雷と同じ年みたいね。…彼女、一週間前にある組織に攫われたそうよ。それで、その両親に身代金の要求が来たらしいの。今回の依頼主はその両親ね。」

潜伏先はまだわからないわ。その搜索も以来の内なの。此所までで質問はある？」

雷は怪訝そうに、

「…ちよつと待て。…神童って…あの神童なのか？」

京子は笑みを浮かべ、

「ええ、貴方の推測している神童よ。」

「…マジかよ。」

雷が驚くのも無理は無いのだ。

何故なら神童とは、古来より日本を妖魔より守つて来た由緒正しきシャーマン（巫女）の一族だからだ。

神童一族の前では一般の一流術者は霞んで見えるとさえ言わしめた超一流シャーマンの一族である。「…あの神童家の…って誘拐つて…仮にもあのバケモンの一族に名を連ねてる奴なんだろ？そいつを誘拐できる組織ってどんな組織だよ。」

雷がもつともな疑問を投げ掛けると、

「…それがどこの組織なのかわからないのよ。…私もそれについては情報を集めて見るわ。とにかく重要な仕事よ。きつちりやって頂戴。運がよければ神童に覚えて貰えるかもしれないしね。」

「…俺まだ受けるとは言つてな」

「断る気は無いわよねえ?」。

…この時雷は言葉を遮って恐怖の言霊を吐く京子から死の匂いを感じ取ったという。

「まさか。僕が京子様の仕事を断る訳ないじゃないですか?」。  
口調は元気いっぱいだったが目は泣いていた。

## 第4話（前書き）

随分間が開いてしまいましたか…どうぞ

## 第4話

「まったく面倒くせえ事になったぜ。…大体京子の奴も何で厄介な仕事だけ俺に回すんだよ！俺はもつと…こつ楽な仕事で小金を稼ぎつつ穏やかで平和な生活を送りたいのに…」

若者らしくない、これから未来あきの夢と希望を一瞬でぶち壊すようなネガティブ思考丸出しの発言をする雷。

「無理だな。お前みたいなお動乱の星の下で生まれたような奴がそんな安穩とした人生送れるワケねえだろ。」

雷のジジクサイ発言に冷静に突っ込みを入れるオツさん。

「…マスター、そりゃあれか？…俺がトラブルメーカーって事か？」

「ガハハ！坊主…違うつて言うのか？笑わせるんじゃないよ。ガハハ。」

豪快に笑い飛ばすオヤジ、雷の仕事仲間の溜まり場であり情報収集の場であるバー

「ランブル」のマスターだ。それと同時に情報屋でもある。

バーのマスターという職業の性質で情報も入る…というのはマスター談。実際の所はどう情報を集めているのかはわからないのだ。

「…で早速なんだけどよ。あんたなら何かおいしい情報掴んでねえか？」

雷は辺りに他に人がいない事を確認しつつ話を切り出す。

「ほう…何の話だ？」

ニヤけながらシラを切るマスター。

「…ちつ、金なら払うよ。何ならいつもの倍出してもイイ。知ってる事全部教えてくれ。例の誘拐事件について…アンタならこれだけ言えば判るだろ？」

「毎度…三日前から来栖町の山奥の廃工場付近に人の出入りがあるらしい。おめえの目的の姫さんも多分そこだぜ。取り敢えず行く

なら気をつけて行けよ。誘拐犯の奴ら相当な使い手みた…」

バンツ！！と金をカウンターに叩き付け、

「サンキュー、マスター！！当たってみるよ。」

店を後にする雷。

「…ったく、人の忠告は最後まで聞いてけよ。」

落ち着きのない雷にマスターの助言は届く事は無かったらしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7006b/>

---

雷の誓約

2010年10月11日14時23分発行